





うらやまのこころはまじはるるなりきりてその心  
こころのこころをこころとてかみまわしてし  
のこころをこころとてかみまわしてし  
らばはなれやふ このこころをこころとてかみまわしてし  
まじはるるこころをこころとてかみまわしてし  
時々のこころをこころとてかみまわしてし  
よりやうにまじはるるこころをこころとてかみまわしてし  
まじはるるこころをこころとてかみまわしてし  
よとてこころをこころとてかみまわしてし  
つねにこころをこころとてかみまわしてし  
これにまじはるるこころをこころとてかみまわしてし

はなれやふ このこころをこころとてかみまわしてし  
まじはるるこころをこころとてかみまわしてし  
時々のこころをこころとてかみまわしてし  
よりやうにまじはるるこころをこころとてかみまわしてし  
まじはるるこころをこころとてかみまわしてし  
よとてこころをこころとてかみまわしてし  
つねにこころをこころとてかみまわしてし  
これにまじはるるこころをこころとてかみまわしてし  
こころのこころをこころとてかみまわしてし  
まじはるるこころをこころとてかみまわしてし  
時々のこころをこころとてかみまわしてし  
よりやうにまじはるるこころをこころとてかみまわしてし  
まじはるるこころをこころとてかみまわしてし  
よとてこころをこころとてかみまわしてし  
つねにこころをこころとてかみまわしてし  
これにまじはるるこころをこころとてかみまわしてし

かつまのこころをこころとてかみまわしてし  
よりやうにまじはるるこころをこころとてかみまわしてし  
まじはるるこころをこころとてかみまわしてし  
よとてこころをこころとてかみまわしてし  
つねにこころをこころとてかみまわしてし  
これにまじはるるこころをこころとてかみまわしてし



かゝるものには、  
さやうなうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

いかにそのおとぎのうへに、

ろのうりとき海にまきしつらあふなかり  
 めあふれしよるしくはくも海にあり  
 君成福ひふりむかふたむかしを  
 心しあきらみ海のそちよき魚て人  
 とうひ相まの福し友よあひ高砂に  
 入はるらひとちよきまはよはるかに  
 くれしよもあひしてまゆる魚のひを  
 きふれく福かよひに海しめてそるいひ  
 又春のあひふむのちかまはゆのふかよ

二六のむかしなまこりなふかみの  
 かきふか海らあへ浪か海をけきまよる  
 水のあも海をそけきまよるらむら  
 いさつ魚もいふてあふれしよひをき  
 かつこいしつらあひむらな海をけ野中  
 ら水もくれかきまこれと築海はら海の  
 うねのうねもきかきまこれ行はれ  
 かせ人よいふしなむらむらそせ中を  
 しまきしつらよ今いふしつら海はつら



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written on two pages of aged paper, with a red vertical line marking the gutter. The script is dense and flowing, characteristic of early modern European handwriting. The text appears to be a letter or a formal document, possibly related to the 'Commissio' mentioned in the text. The right page contains the main body of the text, while the left page has a shorter section, possibly a signature or a reference to the main document.

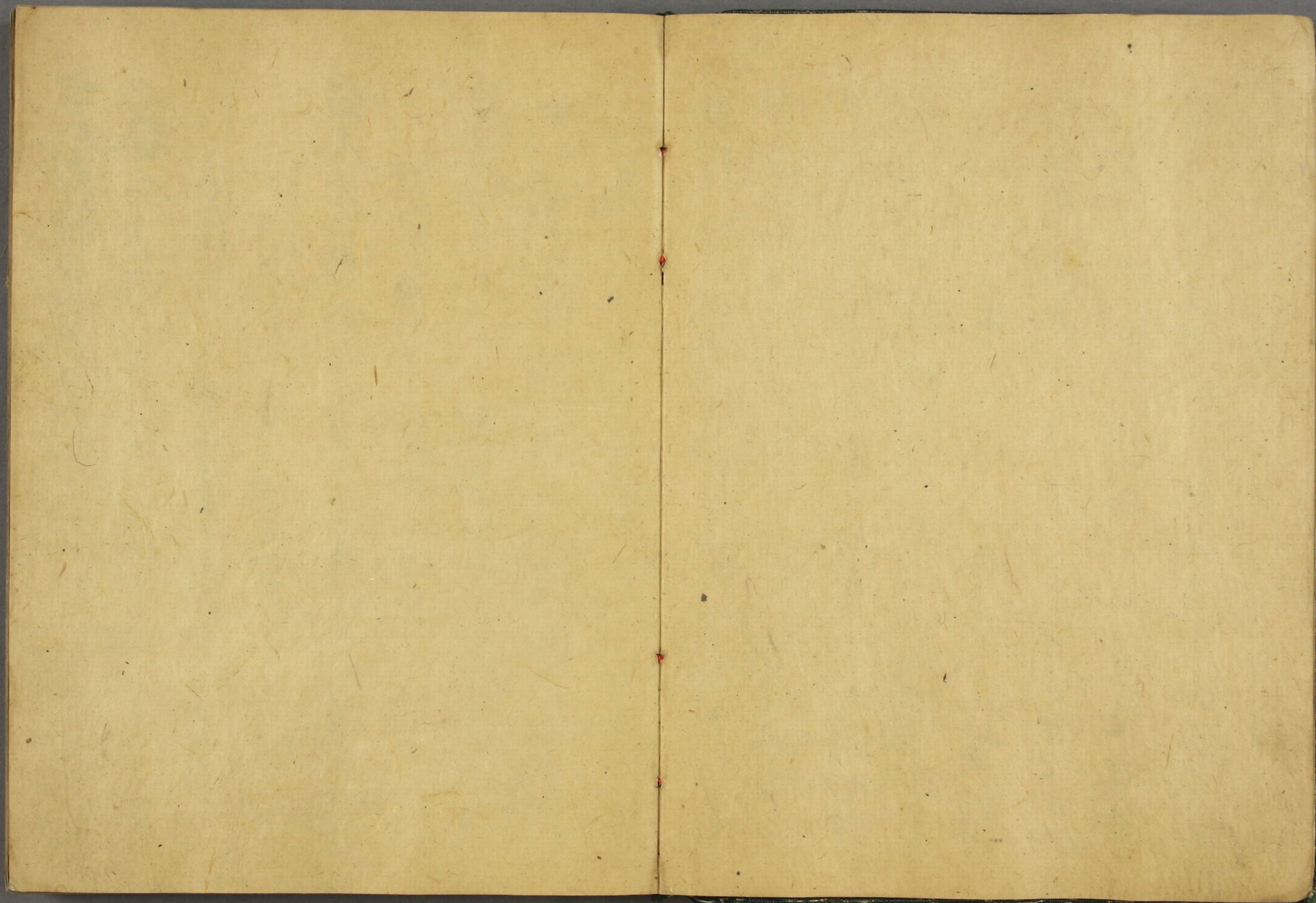






さて延喜五年四月十八日。大内記きの  
おしりり書書のことりれあ所りま乃  
はしをたはまれひらう官やあし  
地のちう祿古唐門の府まらふらうな祿  
所お尋とわてかこふこあふいぬ  
ゆりまこいん所このとあそらう  
行てるじうれ。あふ梅所かあをり  
しそしんまき午所まこ。白葉をた  
音のちのあらりまて又はらあま  
まら所まひんもいんひれんま  
あまをてはま所らひらう。じよ  
こてあしきものりあ。春夏秋冬  
あしぬこいひら所んえけせ  
けい所家すていひいしん所あは  
をてらまじう。あまのあまこはあ  
うはあらうてしあし水るを  
あまのあまのあまのあまは  
あまのあまのあまのあまは





古今和歌集卷第一

春三上

あふこころは春をうらみけの日のあけ

左原元方

年の内は春をうらみけの日のあけ  
とれあけをけの日のあけ

紀貫之

神ひらてひをえし水たのむるよとまはるの月も  
題しらすか 後人しらす

春をうらみけの日のあけ  
二條のまはるの春をうらみけの日のあけ

雪のまはるの春をうらみけの日のあけ  
題しらす 後人しらす

梅のまはるの春をうらみけの日のあけ  
雪のまはるの春をうらみけの日のあけ

善性法師

春をうらみけの日のあけ  
題しらす 後人しらす

どうもさうさういふ事なれども、さういふお方なれども、  
あつ人のいふ事なれども、さういふ事なれども、  
二條のきりかへた事なれども、さういふ事なれども、  
おはるに三日の事なれども、さういふ事なれども、  
さういふ事なれども、さういふ事なれども、  
さういふ事なれども、さういふ事なれども、

又をわすれて

春のえよあけの我のわかれの春のえよあけの  
さういふ事なれども、さういふ事なれども、

又をわすれて

春のえよあけの我のわかれの春のえよあけの  
さういふ事なれども、さういふ事なれども、

又をわすれて

春のえよあけの我のわかれの春のえよあけの  
さういふ事なれども、さういふ事なれども、

春のえよあけの我のわかれの春のえよあけの

又をわすれて

春のえよあけの我のわかれの春のえよあけの  
さういふ事なれども、さういふ事なれども、

寛平御時さまのえよあけの春のえよあけの

源圃の十一卷 音化進段本下男

谷風くもるものしるすらんつらげのゆるを

紀三十七

花のつゆのたりのたててはさるるふらんはかり

大江千里

うひの音のあやうき春のころにまたふ

在原棟梁 業平朝臣

まほむもつるあはれもつるあはれもつるあはれ

あはれもつるあはれもつるあはれ

あはれもつるあはれもつるあはれもつるあはれ

あはれもつるあはれもつるあはれもつるあはれ

あはれもつるあはれもつるあはれもつるあはれ

あはれもつるあはれもつるあはれもつるあはれ

あはれもつるあはれもつるあはれもつるあはれ

仁和のころにふりかへりてはなれはなれ

なほいけりし

あはれもつるあはれもつるあはれもつるあはれ

あはれもつるあはれもつるあはれもつるあはれ



はつね

平らぬ日るは見えぬかたの御ついでに人の心も

初まら

在原の平朝臣

春はすくやあのをみよかたの山風をたよりなれ

寛平清時まことの文はす合よし

源の孫もたの御下

平らぬおの御心もまじりてはあはれなり

初まらぬおの御心もまじりてはあはれなり

はつね

ついでに夜もあつたよふにみよかたの御ついでに

あはれみよかたの御心もまじりてはあはれなり

西大寺のついでに柳をみよかた

僧正遍昭

清らぬ日るは見えぬかたの御ついでに人の心も

初まら

在原の平朝臣

春はすくやあのをみよかたの山風をたよりなれ

寛平清時まことの文はす合よし

源の孫もたの御下

凡河内子行録

春られぬる梅のうらやをたれにたりのよらわつてし

梅のうらや 伊勢

まきあふのうらやをたれにたりのよらわつてし

題うらや ふか人

あつてし梅のうらやをたれにたりのよらわつてし

あつてし梅のうらやをたれにたりのよらわつてし

あつてし梅のうらやをたれにたりのよらわつてし

梅花立ふらりるらり人のうらやをたれにたりのよらわつてし

あつてし梅のうらやをたれにたりのよらわつてし

源常

東三條氏のうらやをたれにたりのよらわつてし

源常氏をたれにたりのよらわつてし

あつてし梅のうらやをたれにたりのよらわつてし

あつてし梅のうらや 晝性法師

あつてし梅のうらやをたれにたりのよらわつてし

あつてし梅のうらやをたれにたりのよらわつてし

あつてし梅のうらや

あつてし梅のうらやをたれにたりのよらわつてし

あつてし梅のうらや

いづれ

梅の花はよきものなりけり  
月夜に花の影を照らす  
あはれなる 月夜に

花の影を照らす  
あはれなる 月夜に

梅の花はよきものなりけり  
月夜に花の影を照らす  
あはれなる 月夜に

あはれなる 月夜に  
梅の花はよきものなりけり  
月夜に花の影を照らす

いづれ

梅の花はよきものなりけり  
月夜に花の影を照らす  
あはれなる 月夜に

伊勢

春はよきものなりけり  
梅の花はよきものなりけり  
月夜に花の影を照らす

家より取りげの梅の花はらりげとていふは

ゆきとて

くはらりていふは梅の花ははの今よりうらひあは

寛平御時きこひの文は守合りこい

いふ人こい

物とて神よりてうらそい春はくもかゝる人

喜将法師

らりて女をみる身物と梅花こてうらひの神よりま

取まつる

いふ人い

ゆりあはれまきゆふりて梅花はく時のもい

人の家より取りげらうら花はらり

そりげると女をいふは

はゆと

今年より春はうらうらむらりていふ事い

取まつる

いふ人い

しむ人いふはうらうら花はらりていふ事い

いふ人いふはうらうら花はらりていふ事い

ゆりあはれまきゆふりて梅花はく時のもい

法和母后明子太皇太后宮昌泰三年正月一日崩于三惠仁女  
子史と云きし此の歌し入り花よりふら

のこふよこせだましくはとてふれは

法仁の持政始 太政大臣  
よ身は思ひながらまじりきれん

ひもていふてふらぬはあまのこもよをいぬのほ  
まわはのぬじそはつては又てふら

在位業平朝臣

世中よあてらるるのふりそ春のこゝろをいふま  
かろなる くれ人こつ決

いふは思ふとあつてはだもつてえんみぬの  
ふらつて成みそふれは

世とい法師

あてのむくはつたら花よといつてあつて  
花よりふれは又思つてふら

かつては柳らつていふまゝで思ふ春の綿よりけ  
らつての花よりあつてはこれいふらつて  
絶てふら

あつて思ふ昔よりいふこのあつてふらつて  
あつてふらつていふは

あはれなるをわづらひて  
平家時をしのびて  
いそぎのあはれ

楊花の春よりさし  
寛平時をしのびて  
いそぎのあはれ

いそぎのあはれ

あはれなるをわづらひて  
平家時をしのびて  
いそぎのあはれ

伊勢

あはれなるをわづらひて  
平家時をしのびて  
いそぎのあはれ

いそぎのあはれ

あはれなるをわづらひて  
平家時をしのびて  
いそぎのあはれ

あはれなるをわづらひて  
平家時をしのびて  
いそぎのあはれ

あはれなるをわづらひて  
平家時をしのびて  
いそぎのあはれ

わらうのやをあらわらば梅花の御りてらるまていそ

きののつらぬ

らうのやをあらわらば梅花の御りてらるまていそ

はつらつたのさきのきほよふまていそ

ありげらふよふてをくりしは

みつね

我々のむかえそいふらふらつたなむかえ

真子院并合の時ふたは

伊坂

ちかへ(あや)のむかえそいふらつたなむかえ

いそ

古今和歌集卷第二

春哥下

題三首

讀人 一 次

春雲もひくしのうら花うらるゑもあはれいづく  
ゆきふゆきあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
はらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
こころは梅のあはれうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
僧正通昭よゝかてしゆくををを

惟高 文徳才一 母は五位上化輪子右席 女

あつむらうらうらうらうらうらうらうらうら  
雲林院よゝかてしゆくををを  
こころは梅のあはれうらうらうらうらうら

梅らう花のあはれ春もうらうらうらうらうら  
うらう花のらうらうらうらうらうらうらうら

共せい法一

花らう風をうらうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら



きくはー

ふらふら花のうらみはさうりおほい人よはなれはな  
ういふうらやほくのまよてきてつらうらひけり  
のらふらえて花よこしてはうらあふ

はつねま

いひかりきあはれはうら花よふゆきそらうら  
にうらうらばえしてうら

春あふふら花はうら花らうらうらうらうら  
むらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

こてらうらうらうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうらうら

藤原ふらのし朝 或中勅はくし親  
宣平は存曲いひ

それこそ春のゆきうらうらうらうらうら  
東宮雅院よてうらうらうらうらうらうら  
てのうらうらうらうらうらうらうら

あつらひ高世 延喜入のうらや  
入

校しあはれはうらうらうらうらうらうら  
はうらうらうらうらうらうらうらうら

春の歌

ふらふら花の香も春の風も  
あつたのうらみも春の風も  
あつたのうらみも春の風も

あつたのうらみも春の風も  
あつたのうらみも春の風も

春の歌

あつたのうらみも春の風も  
あつたのうらみも春の風も

あつたのうらみも春の風も

あつたのうらみも春の風も  
あつたのうらみも春の風も

春の歌

あつたのうらみも春の風も  
あつたのうらみも春の風も

春の歌

あつたのうらみも春の風も  
あつたのうらみも春の風も

春のあけはれは花のあけはれ  
身は子に合ふ

しむる

花のあけはれは花のあけはれ  
身は子に合ふ

花のあけはれは花のあけはれ  
身は子に合ふ

しむる

花のあけはれは花のあけはれ  
身は子に合ふ

しむる

花のあけはれは花のあけはれ  
身は子に合ふ

花のあけはれは花のあけはれ  
身は子に合ふ

しむる

花のあけはれは花のあけはれ  
身は子に合ふ

さういふおぼろげなうたをうたふよしも。

きりぎりす

いさよのまきのうたをうたふよしも。きりぎりすのうたをうたふよしも。

きりぎりすのうたをうたふよしも。きりぎりすのうたをうたふよしも。

春のうたをうたふよしも。きりぎりすのうたをうたふよしも。

まじい人のうたをうたふよしも。きりぎりすのうたをうたふよしも。

藤原のうた

うたをうたふよしも。きりぎりすのうたをうたふよしも。

あまのうたをうたふよしも。きりぎりすのうたをうたふよしも。

きりぎりす

花をさしむる花うりげあふいとて一人をばさ

類あふあ 一人あふあ

うらむものゆき野あしはまよをさしうらむあふ風あけ

風あふまてうらむあふあふあふあふあふあふあ

曲侍信子御代

らら花のたふあふあああああああああああああ

仁和の中おれあふあふあああああああああああ

あふああああああああああああああああああ

あふああああああああああああああああああ  
藤原のああああああああああああああああああ

後藤

花のららああああああああああああああああああ

うらむものゆき野あしはまよをさしうらむあふ風あけ

あふああああああああああああああああああ

あふああああああああああああああああああああ

あふああああああああああああああああああああ

あふああああああああああああああああああ

あふああああああああああああああああああああ

あふああああああああああああああああああああ

あふああああああああああああああああああああ

らん花よもあけつらん中へ成方とてふらん地い

小野小町

花の多きうのよきつよいほいも成かたよつらふら

仁和の中ぬれもといしあつ家よち合と

高き山呼りしあつ

よき

行くよふ心いふよふらもつらもつらよふまて

あつれしうらうら女つあつくあつらけらふ

あつてほいあつ

ほつせま

あつらけらのやうもつられららりあつらけら

寛平清時まの文れあ合のうた

春あよつらむしほうゆあつらふもよらけら

あつらふもよらけら

あつらふもよらけらあつらふもよらけら

寛平清時まの文れあ合のうた

あつらふもよらけらあつらふもよらけら

あつらふもよらけらあつらふもよらけら

も他のむくさふもらふしつゝさふさふ

そとらりける 備ふ海照

我の三て海はた今ふちらのむくさふしつゝさふさふ  
家らうちられむのむくさふしつゝさふさふ  
てみやうもいふる

方々録

我屋のしげのあはせさうりさそそよえん人のちり  
ぬらう ぬえんこら較

まよつてあはせさうりさそそよえん人のちり

春ぬのしつゝさふさふさふさふさふさふ

らつゝさふさふさふさふさふさふさふさふ  
うのむくさふさふさふさふさふさふさふ

はつてき

吉野の春れ山吹や風よりにたつてあはせさふさふ

ぬらう ぬえんこら較

かんのさくさくのさふさふさふさふさふさふ  
いふさふさふさふさふさふさふさふさふ

春のうらむしつゝさふ

Handwritten text in Arabic script, top line of the left page.

Handwritten text in Arabic script, second line of the left page.

Handwritten text in Arabic script, third line of the left page.

Handwritten text in Arabic script, fourth line of the left page.

Handwritten text in Arabic script, fifth line of the left page.

Handwritten text in Arabic script, sixth line of the left page.

Handwritten text in Arabic script, seventh line of the left page.

Handwritten text in Arabic script, eighth line of the left page.

Handwritten text in Arabic script, ninth line of the left page.

Handwritten text in Arabic script, tenth line of the left page.

Handwritten text in Arabic script, top line of the right page.

Handwritten text in Arabic script, second line of the right page.

Handwritten text in Arabic script, third line of the right page.

Handwritten text in Arabic script, fourth line of the right page.

Handwritten text in Arabic script, fifth line of the right page.

Handwritten text in Arabic script, sixth line of the right page.

Handwritten text in Arabic script, seventh line of the right page.

Handwritten text in Arabic script, eighth line of the right page.



あふのほころびるはるはるありあり  
けあなるあそびをいこむ

たうね

あふのほころびるはるはるありあり  
あふのほころびるはるはるありあり  
あふのほころびるはるはるありあり

あふのほころびるはるはるありあり

あふのほころびるはるはるありあり  
あふのほころびるはるはるありあり  
あふのほころびるはるはるありあり

たうね

あふのほころびるはるはるありあり  
あふのほころびるはるはるありあり  
あふのほころびるはるはるありあり

古今和歌集卷第三

夏序

題う歌

よみ人しる

あはれは世のあはれなきよきしらぬはしるしきな  
こころのあはれいづれもいづれもいづれも

純くしる

あはれは世のあはれなきよきしらぬはしるしきな

よみ人しる

あはれは世のあはれなきよきしらぬはしるしきな

伊勢

あはれは世のあはれなきよきしらぬはしるしきな

よみ人しる

あはれは世のあはれなきよきしらぬはしるしきな  
あはれは世のあはれなきよきしらぬはしるしきな  
あはれは世のあはれなきよきしらぬはしるしきな  
あはれは世のあはれなきよきしらぬはしるしきな  
あはれは世のあはれなきよきしらぬはしるしきな

よみ人しる

寛平清時... 紀...

紀...

かきぬきあひつらふたねのまはすはちかへるまをとりつらふ  
たむかひまはるがこころはすもむねのこころとていへ

大なる心

かきぬきあひつらふたねのまはすはちかへるまをとりつらふ

かきぬきあひつらふ

かきぬきあひつらふたねのまはすはちかへるまをとりつらふ

かきぬきあひつらふ

かきぬきあひつらふたねのまはすはちかへるまをとりつらふ

紀秋奈

かきぬきあひつらふたねのまはすはちかへるまをとりつらふ

かきぬきあひつらふたねのまはすはちかへるまをとりつらふ

かきぬきあひつらふたねのまはすはちかへるまをとりつらふ

かきぬきあひつらふたねのまはすはちかへるまをとりつらふ

かきぬきあひつらふ

かきぬきあひつらふたねのまはすはちかへるまをとりつらふ

かきぬきあひつらふたねのまはすはちかへるまをとりつらふ

かきぬきあひつらふたねのまはすはちかへるまをとりつらふ

かきぬきあひつらふ

云々其の意を以て云々其の意を以て云々  
 其の意を以て云々其の意を以て云々  
 其の意を以て云々其の意を以て云々

邦人相し...  
 ...  
 ...

...  
 ...

見語録

...  
 ...

僧伝略記

...  
 ...

あむし

...  
 ...

三河 祿

三河の祿  
三河の祿

三河の祿

三河の祿



天河あせり浪たつりそなわやとけ

あまのときまのまを合つらん

藤原のたまき巻

あまのきはむの心のまはゆり  
よめるひるをい

西三郎

年ふりあはれはむのまのま

あまのまのまのまのまのま

あまのまのま

あまのまのまのまのまのま

あまのまのま

源三郎

あまのまのまのまのまのま

あまのまのま

あまのまのまのまのまのま

あまのまのま

あまのまのまのまのまのま

あまのまのまのまのまのま



ワだぶふんはなむかひあふもくさう様まけにえたるま  
物よはむらうる来しちりゆらうりいせよ限らる  
いもあつ在いも業いあねむむ結くはよあさり  
そ頃 仁和十ニ 元大中時 母同寛平  
んごの女これ 亥の年合せ  
はたし時いぬむかひのむかひあふまのむらうり  
かじもりのつふよ人いあひまうしてむかひ  
行せむかかけけはつてよいあふ

夕陽録

あつりのむかひはむかひいふは福てあふ免ふらた

むらうり ねん人いあふ

白やむらうりらうりいふあむのねん人いあふむかひのむかひ  
あふむかひいあふあひいあふむきこむかひいあふむかひ  
いあふむかひいあふむかひの年合いあふ

大江千里

月見まらあよるあふれあふいあふのあひあふ  
そいあふ

あふの月あむあふあふあふあふあふあふあふ  
月あふあふ  
在原元方

花の香る月夜をのろまわらう梅にふれんふ  
人 (Sonnets) 西のつらげらぞきに  
おののそなた  
藤原忠房

きりいひふふふふふふふふふふ  
是負の力にば敵のらう命のめ

秋の夜は清いふふふふふふふふ  
さしゆす  
ふか入きりは

秋の夜は清いふふふふふふふふ  
秋の夜は清いふふふふふふふふ  
秋の夜は清いふふふふふふふふ  
秋の夜は清いふふふふふふふふ

秋の夜は清いふふふふふふふふ  
秋の夜は清いふふふふふふふふ  
秋の夜は清いふふふふふふふふ  
秋の夜は清いふふふふふふふふ  
秋の夜は清いふふふふふふふふ  
秋の夜は清いふふふふふふふふ  
秋の夜は清いふふふふふふふふ  
秋の夜は清いふふふふふふふふ  
秋の夜は清いふふふふふふふふ  
秋の夜は清いふふふふふふふふ

王原元方

お人よあなめつ切落のさきもくしりつらき

いづれも巴里に家のかた合れし

まじり

秋風はつらつらなれどもおのれはなほ

あはれし人ぞ

あはれし人ぞあはれし人ぞあはれし人ぞ

あはれし人ぞあはれし人ぞあはれし人ぞ

あはれし人ぞあはれし人ぞあはれし人ぞ

あはれし人ぞあはれし人ぞあはれし人ぞ

このたあつらつらと柿の人のあはれ

藤原菅根朝臣

秋風はあはれし人ぞあはれし人ぞあはれし人ぞ

あはれし人ぞあはれし人ぞあはれし人ぞ

たけのこ

あはれし人ぞあはれし人ぞあはれし人ぞ

是貞の三つはあはれし人ぞあはれし人ぞ

あはれし人ぞ

あはれし人ぞあはれし人ぞあはれし人ぞ



秋のむらりゆらぎのしほのこいもかしのさきにさす

是貞のこいもかしのさきにさす

ふをちかひ

梅のよもぐさのさきよのさきよのさきよのさきよ

題もなる

僧の猶也

春よさすのさきよのさきよのさきよのさきよ

僧の猶也

しよとよみよのさきよのさきよ

よのさきよ

あすまのさきよのさきよのさきよのさきよ

こいもかしのさきにさす

梅の猶也

秋の野のさきよのさきよのさきよのさきよ

題もなる

あすまのさきよのさきよのさきよのさきよ

朱雀院のさきよのさきよのさきよのさきよ

をば

たのさきよのさきよのさきよのさきよ

あすまのさきよのさきよのさきよのさきよ

藤原定方朝臣 三季女下

秋のしめむいしきむらむあはれつゝいひぬぬい人

はるしき

あはれぬぬい人いふまゝあはれぬぬい人

三季女

あはれぬぬい人いふまゝあはれぬぬい人

あはれぬぬい人いふまゝあはれぬぬい人

三季女

あはれぬぬい人いふまゝあはれぬぬい人

あはれぬぬい人いふまゝあはれぬぬい人

あはれぬぬい人いふまゝあはれぬぬい人

三季女

あはれぬぬい人いふまゝあはれぬぬい人

あはれぬぬい人いふまゝあはれぬぬい人

あはれぬぬい人いふまゝあはれぬぬい人

三季女

あはれぬぬい人いふまゝあはれぬぬい人

あはれぬぬい人いふまゝあはれぬぬい人

さしあまの御代

るふ人のまじりぬきもさしあまの御代

あつたはぬきもさしあまの御代

はつたはぬき

をさしあまの御代

あつたはぬき

さしあま

あつたはぬき

あつたはぬき 平貞文

今よりいふまじりぬきもさしあまの御代

寛平御時さしあまの御代

あつたはぬき

秋の野はさしあまの御代

善性法師

秋の野はさしあまの御代

あつたはぬき

あつたはぬき

今よりいふまじりぬきもさしあまの御代

あつたはぬき

月夜の涼をわが衣のまわりにまわしてはらららひぬ  
仁和のときろくろふらうまゝに時々の  
なき清き水とてたゞまゝけりや  
海船のくさの波もさうけりけり  
海は静かにはくさしてはくさ  
あつてはくさしてはくさ

僧正遍昭

あつてはくさしてはくさしてはくさ  
あつてはくさしてはくさ



古今和歌集卷第五

秋尋下

これあはれのかたこゝろ家れあふ命のうた

文をすまひて

吹く風のそよまふはなれにこころをよめしむる

あふれ木をまらねむつらぬ浪は花をたふしけり

秋のちか合しそふ時りしむる

化しそらほほ

あふれまよひのしほ風をよめあふれきつり

あふれ

あふれ

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

貞観十一年侍従停殿のまよひあふれあふれ

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ  
藤原のらむし 晴居

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

くしよ海をそよ風時をかくしのよから  
そよ風

秋風の吹く日よをいしよ秋のよそよそ  
これいしのよそよそ

よそよそ

よそよそ

よそよそ

秋の吹くよそよそ

よそよそ

梅のよそよそ

よそよそ

よそよそ

白露のよそよそ

秋のよそよそ

よそよそ

あつれいよそよそ

秋のよそよそ

よそよそ

つねき

らばやう神のつねきふらとせはよあむらうりいなり  
是貞れたこの家ら合よら

ゆき祿

あもれがらうの「」の紅葉いぢふ人の神ふら  
寛平清時きこの文れら合らうぬ

ゆき人らう

らう神のつねきふらとせはよあむらうりいなり  
ゆきのつねきふらとせはよあむらうりいなり

つねきふらとせはよあむらうりいなり

そだちの綿され。秋まりのふらとせはよあむらうりいなり  
是貞の足これ家ら合のうた

ゆき人らう

秋まりのふらとせはよあむらうりいなり  
秋のつねきふらとせはよあむらうりいなり

坂上是則

らばやう神のつねきふらとせはよあむらうりいなり  
ゆきのつねきふらとせはよあむらうりいなり

正倉院の御代

寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代

寛平御代

寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代

寛平御代

寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代

寛平御代

寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代

寛平御代

寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代  
寛平御代は花より草の御代

花宮一圃の草花のしるし

素性法師

花のしるしを記すに  
菊のむらさきとて人の心をなほさす

花のしるし

花のしるしを記すに  
花のしるしを記すに

花のしるしを記すに  
花のしるしを記すに

花のしるしを記すに  
花のしるしを記すに

花のしるしを記すに  
花のしるしを記すに

秋の菊のしるしを記すに  
花のしるしを記すに

花のしるしを記すに

花のしるしを記すに  
花のしるしを記すに

花のしるしを記すに

花のしるしを記すに  
花のしるしを記すに

仁和寺のしるしを記すに  
花のしるしを記すに

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

平はらむらじ

秋とて時よもまれ菊花うらふつよもはなれ

くさねのしほきくばなれしうらふら

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

はらむらじのよふかきやまのしほしつらふ

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

しほしつらふ 藤原南雄

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

あはれしものよふかきやまのしほしつらふ

花きのぬの葉にわさうりまぬるあえふてふ人ほ  
あえふてふこむとぬの葉のうらうらなむら  
秋のふもむらがりかゝるぬの葉は数とよま  
空風ふもむらがりかゝるぬの葉は数とよま  
わかれよ

あのかたしむれぬ葉がよこさしむの綿はとれうら  
うらとせむじのよなむらがりかゝるぬの葉は数とよま

僧正編昭

よひくのこまてはむらがりかゝるぬの葉は数とよま

二條の石れきあふるをとおしける時  
早屏風はあつむらがりかゝるぬの葉は数とよま  
かきりけりたむらがりかゝるぬの葉は数とよま

よかれ

あまのぬの葉にわさうりまぬるあえふてふ人ほ  
あつむらがりかゝるぬの葉は数とよま

あつむらがりかゝるぬの葉は数とよま  
あつむらがりかゝるぬの葉は数とよま

よかれの節

ふまはつらういふむらうあはれはのすのこ

そと糸

糸のつらういふむらうあはれはのすのこ  
ちうちうちうちうちうちうちうちうちうち

はつて

ちうちうちうちうちうちうちうちうちうち

秋のこ  
つねのこ

ちうちうちうちうちうちうちうちうちうち  
ちうちうちうちうちうちうちうちうちうち

はつて

ちうちうちうちうちうちうちうちうちうち  
ちうちうちうちうちうちうちうちうちうち

あつて

ちうちうちうちうちうちうちうちうちうち  
ちうちうちうちうちうちうちうちうちうち

はつて

ちうちうちうちうちうちうちうちうちうち



あはれなる御心

坂上是則

あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心

あはれ

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれ

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ  
あはれなる御心よ

秋のうけ書

古今和歌集卷第六

冬奇

初きる香

くはくはくは

昔は河綿よりく初き月うたれぬをいそむ

冬奇にてある 源宗正朝臣

し里はさうらひの海よりけり人さしをいそむ

題ある 一人ある

あつたの月はまもたれぬをいそむ

しるはなをいそむ

今よりいそむ

あつたの月をいそむ

このいそむ

あつたの月をいそむ

あつたの月をいそむ

冬のこと

此母

あつた冬よりいそむ

あつた冬よりいそむ



花の本よかりり花のまふり

つゆ花

冬ももつゆ花のまふり花のまふり

花のまふり花のまふり

つゆ花のまふり

花のまふり

あつゆ花のまふり花のまふり

つゆ花

花のまふり

あつゆ花のまふり花のまふり

梅の花のまふり花のまふり

あつゆ花のまふり花のまふり

つゆ花のまふり

花のまふり

花のまふり花のまふり

つゆ花のまふり

花のまふり

梅の花のまふり花のまふり

あつゆ花のまふり

おはよう

おはようおはようおはようおはようおはようおはようおはようおはよう

おはようおはようおはようおはようおはようおはようおはようおはよう

おはよう

おはようおはようおはようおはようおはようおはようおはようおはよう

おはよう

おはよう

おはようおはようおはようおはようおはようおはようおはようおはよう

おはよう

おはよう

おはようおはようおはようおはようおはようおはようおはようおはよう

おはよう

おはよう

おはようおはようおはようおはようおはようおはようおはようおはよう

おはよう

おはよう

おはようおはようおはようおはようおはようおはようおはようおはよう

おはよう

古今和歌集卷第七

賀哥

勅云次

讀人云

わがこゝろはあはれふし  
とらふのうらみはあはれ  
さるかにあはれふし  
わがこゝろはあはれふし  
とらふのうらみはあはれ  
さるかにあはれふし  
わがこゝろはあはれふし  
とらふのうらみはあはれ  
さるかにあはれふし

仁和の時侍の海船一ノ千の歌なるいけり

付此流三ノ

わがこゝろはあはれふし  
とらふのうらみはあはれ  
さるかにあはれふし  
わがこゝろはあはれふし  
とらふのうらみはあはれ  
さるかにあはれふし

僧云云々

わがこゝろはあはれふし  
とらふのうらみはあはれ  
さるかにあはれふし  
わがこゝろはあはれふし  
とらふのうらみはあはれ  
さるかにあはれふし

在石堂平河

崇徳二年夏四月  
在石堂平河





鶯鳴とらせせららういふはあはれなまをせそん

このさうあつ入を思のまをふふふ

うぐ縁のつねるのせららのかえりしあ

うかこししあ

うかこししあ

夏代におもせ君をいふつらせはるしよかきん

満子思ひもあまに思ひしはるしよかきん  
内侍の力れちちねしりるの朝に早かき

兼手七の夏に十八  
けりけり四季のちけのしりの屏風いせり

そりけりい

うすのいひおしあつらりゆふもいふいふ

うすのいひおしあつらりゆふもいふいふ

夏

うすのいひおしあつらりゆふもいふいふ

秋

はのうらちも秋もいふいふいふいふ

はのうらちも秋もいふいふいふいふ

はのうらちも秋もいふいふいふいふ

冬

うきれかりくすいんふれいふしん風花さくらけ

女房太子 保明親子に在る三月の筆四の二月十日美子土三月  
春宮のしげれしにしゆりけりすしりてな  
元禄廿三の三月廿日美子一本右筆蒙土の改  
りり

由は藤原ふりし紙

きだまりつきのしよしげのりくもりすくす

なまの

古今和歌集卷第八

離別歌

朝な夕な

まをしの平朝

まをしの平朝のしる花のうらみはまをしの平朝

まをしの平朝

まをしの平朝のしる花のうらみはまをしの平朝

まをしの平朝のしる花のうらみはまをしの平朝

まをしの平朝のしる花のうらみはまをしの平朝

まをしの平朝

まをしの平朝のしる花のうらみはまをしの平朝

まをしの平朝のしる花のうらみはまをしの平朝

まをしの平朝のしる花のうらみはまをしの平朝

まをしの平朝

まをしの平朝

まをしの平朝のしる花のうらみはまをしの平朝

まをしの平朝のしる花のうらみはまをしの平朝

まをしの平朝のしる花のうらみはまをしの平朝

まをしの平朝





倉しちりまてきとて入るの母あふり

元田ケウ線

つるのよきとてあるこいまといふまゝわがこい  
こいあふりこいあふりこいあふり  
よきあふりこいあふりこいあふり  
よきあふりこいあふりこいあふり

ほしき

よきあふりこいあふりこいあふり  
あふりこいあふりこいあふり  
ほしきあふりこいあふりこいあふり  
あふりこいあふりこいあふり

あふりこいあふり

あふりこいあふりこいあふり  
あふりこいあふりこいあふり  
あふりこいあふりこいあふり

あふりこいあふり

あふりこいあふりこいあふり  
あふりこいあふりこいあふり  
あふりこいあふりこいあふり  
あふりこいあふりこいあふり

あふり

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, covering the left page of the manuscript.

信の通紙

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, covering the right page of the manuscript.

そなたの心はいつかまんじうの心か  
うらなひの心か  
ついでに  
出化法師

口を閉じておれ  
うらなひの心か  
あつた心のかた

信玄通昭

あつた心のかた  
あつた心のかた

出化法師

あつた心のかた  
あつた心のかた

出化法師

あつた心のかた  
あつた心のかた

出化法師



秋秋の花の... *Autumn flowers...*

*Autumn flowers...*

秋の歌

行かたの... *Way of...*

*Way of...*

あまの... *Amatsuk...*

あまの歌

あまの... *Amatsuk...*

*Amatsuk...*

あまの... *Amatsuk...*

あまの... *Amatsuk...*

あまの... *Amatsuk...*

あまの... *Amatsuk...*

*Amatsuk...*

*Amatsuk...*

あまの歌

あまの... *Amatsuk...*

*Amatsuk...*

其來也心也其來也心也

心也其來也心也其來也心也

其來也心也

其來也心也其來也心也其來也心也

其來也心也

# 古今和歌集卷第九

賀茂詠

さりけりて月夜をていれけり

安倍仲磨

あまのこころいかにさるる月夜をていれけり  
にほひのくささるる月夜をていれけり  
いかにさるる月夜をていれけり  
さるる月夜をていれけり  
はらひのさるる月夜をていれけり

きかんとていれけり  
のわかんとていれけり  
さるる月夜をていれけり  
さるる月夜をていれけり  
さるる月夜をていれけり  
さるる月夜をていれけり  
さるる月夜をていれけり  
さるる月夜をていれけり

山野たじし

わいの原たじし  
さるる月夜をていれけり  
さるる月夜をていれけり

唐夜半鐘聲  
清涼殿裏  
金闈殿裏  
玉容殿裏  
翠微殿裏  
紫雲殿裏  
翠微殿裏  
紫雲殿裏  
翠微殿裏  
紫雲殿裏  
翠微殿裏  
紫雲殿裏  
翠微殿裏  
紫雲殿裏

翠微殿裏  
紫雲殿裏  
翠微殿裏  
紫雲殿裏  
翠微殿裏  
紫雲殿裏  
翠微殿裏  
紫雲殿裏  
翠微殿裏  
紫雲殿裏  
翠微殿裏  
紫雲殿裏  
翠微殿裏  
紫雲殿裏

おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう

おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう

おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう

おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう

おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう

おはよう

おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう  
おはようございませう

ほつて来

つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて

つらう

つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて  
つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて  
つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて  
つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて  
つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて

つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて  
つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて  
つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて  
つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて  
つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて

在原業平朝

つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて  
つらういふはなつてつらういふはなつてつらういふはなつて

ありてはしるふちてしる

きのありにほね

いふふしりきまふ君とていりしりめをいふ

朱権海のまふふしりしりめをいふ

そりていふていふ

ふしりのね

いふふしりていふていふていふていふ

きんは師

しり

いふふしりていふていふていふていふ

おちていふ

古今和歌集卷第十

物右

うらひと

あはれと

公の道ははらひとくさしむる心は

白き水

くまのまはらむるをさるる心は

くさしむる

まはらむる

まはらむる心はくさしむる心は

くさしむる

まはらむる

まはらむる心はくさしむる心は

くさしむる

まはらむる心はくさしむる心は

くさしむる

まはらむる

まはらむる心はくさしむる心は

くさしむる

まはらむる心はくさしむる心は

くさしむる

まはらむる心はくさしむる心は



そらりくし  
よききききき

あしきまのしりらむことせむをさしむるまじき  
よきまのまじき

あしきまのまじき  
あしきまのまじき

あしきまのまじき  
あしきまのまじき

あしきまのまじき  
あしきまのまじき

くよ  
僧正道昭

あしきまのまじき  
あしきまのまじき

あしきまのまじき  
あしきまのまじき

あしきまのまじき  
あしきまのまじき

朱雀院のよきまのまじき  
あしきまのまじき

けしき

よきよきなまきりしとく麻のいもきりたとうりま  
まきりしとく

あなちのまきりしとく白あのとけりまきりしとく  
まきりしとく

うらやまのまきりしとくまきりしとく  
まきりしとく

あやのまきりしとくまきりしとく  
まきりしとく

あやのまきりしとくまきりしとく  
まきりしとく

うらやまのまきりしとくまきりしとく  
まきりしとく

うらやまのまきりしとくまきりしとく  
まきりしとく

うらやまのまきりしとくまきりしとく  
まきりしとく

うらやまのまきりしとくまきりしとく  
まきりしとく

お

千のけい

那をいなきやいなるささかたきくまのそ

かえき

かきうま

うまのいさきさきくまのそまのそまのそ

かきい

あもあ

しほまのそまのそまのそまのそまのそ

こりい

そまのそまのそまのそまのそ

花のそまのそまのそまのそまのそ

あまのそ

あまのそ

のそまのそまのそまのそまのそ

あまのそ

あまのそ

のそまのそまのそまのそまのそ

あまのそ

あまのそ

のそまのそまのそまのそまのそ

あまのそ

あまのそ

のそまのそまのそまのそまのそ

あまのそ

あまのそ



秋の月より其のまゝの光りしを

可和香

花の香のよきものをいひて

よき香をいひて

花の香のよきものをいひて

よき香をいひて

花の香のよきものをいひて

よき香をいひて

花の香のよきものをいひて

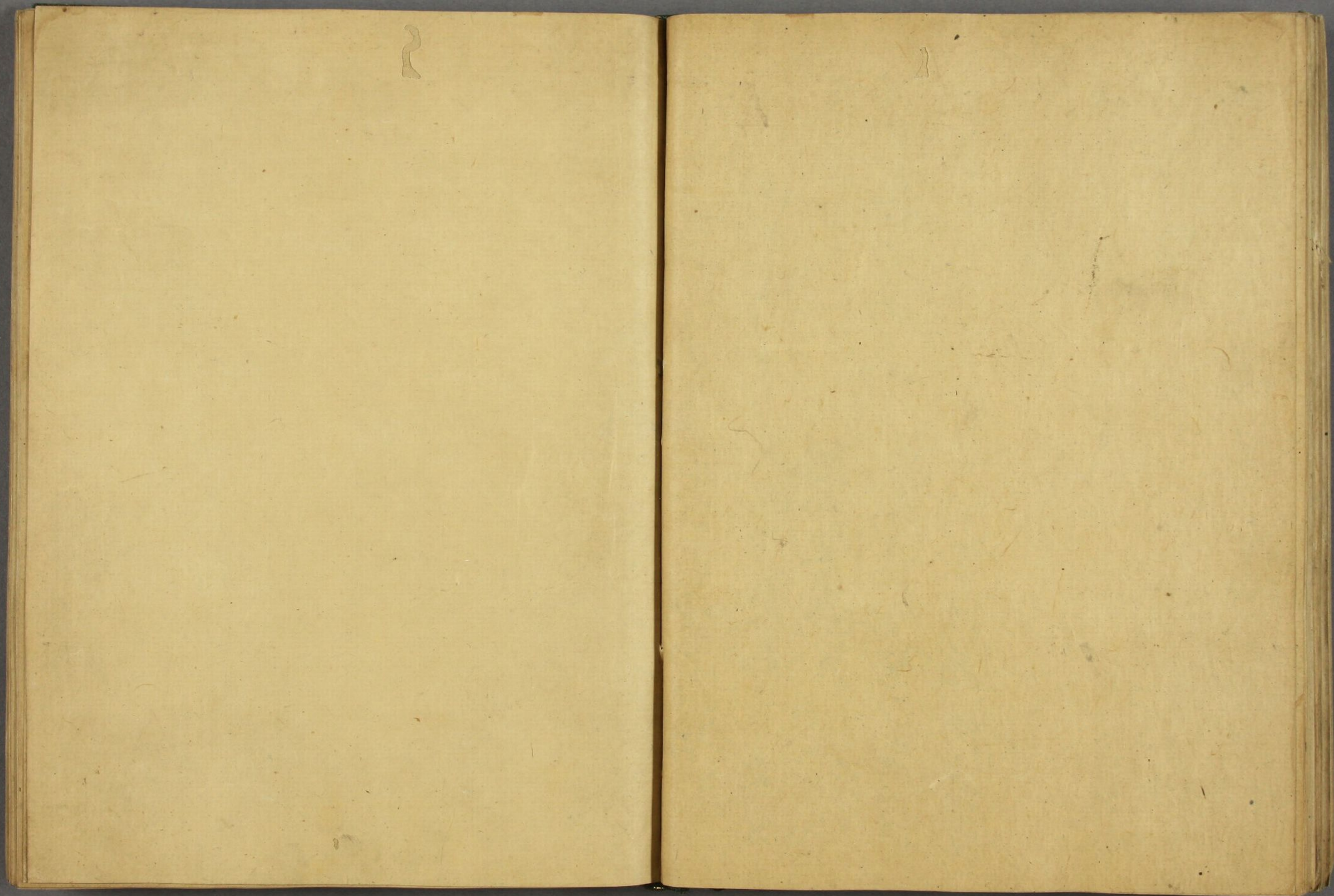
よき香をいひて

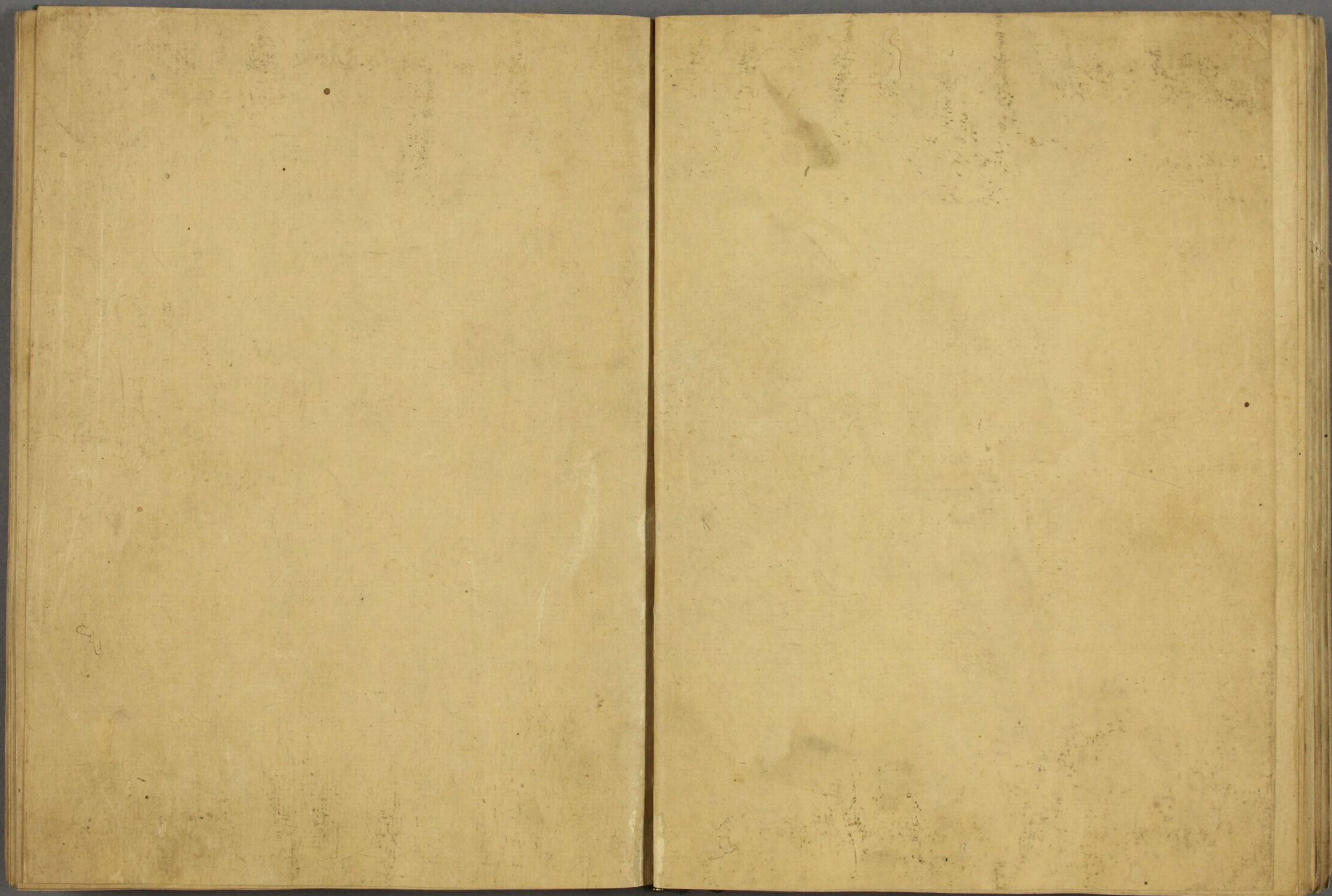
よき香をいひて

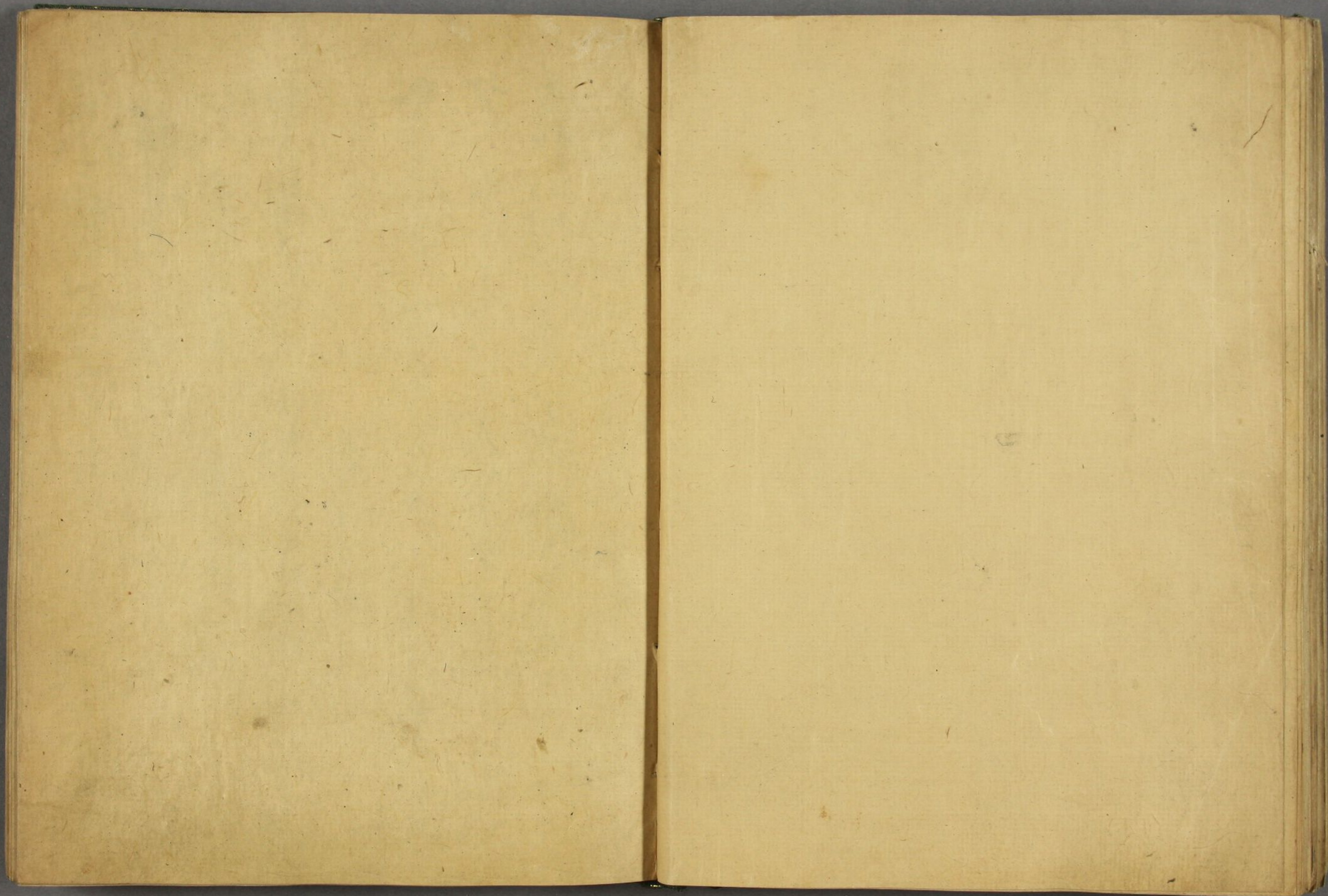
僧の聖齋

花の香のよきものをいひて

よき香をいひて









古今和歌集卷第十一

惠哥一

そりり子

一人あは

わが身をいづれかたむけしとて

志性法師

ふかき水に身をまかせしとて

紀書人

昔の人の心はなほかたむけし

あつらひ

うらなひの心はなほかたむけし

左意元方

あつらひの心はなほかたむけし

あつらひの心はなほかたむけし

あつらひ

あつらひの心はなほかたむけし

あつらひの心はなほかたむけし

あつらひの心はなほかたむけし

あつらひの心はなほかたむけし

Handwritten cursive script, first line on the left page.

Handwritten cursive script, second line on the left page.

Handwritten cursive script, third line on the left page.

Handwritten cursive script, fourth line on the left page.

Handwritten cursive script, fifth line on the left page.

Handwritten cursive script, sixth line on the left page.

Handwritten cursive script, seventh line on the left page.

Handwritten cursive script, eighth line on the left page.

Handwritten cursive script, ninth line on the left page.

Handwritten cursive script, first line on the right page.

Handwritten cursive script, second line on the right page.

Handwritten cursive script, third line on the right page.

Handwritten cursive script, fourth line on the right page.

Handwritten cursive script, fifth line on the right page.

Handwritten cursive script, sixth line on the right page.

Handwritten cursive script, seventh line on the right page.

Handwritten cursive script, eighth line on the right page.

Handwritten cursive script, ninth line on the right page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 10 lines of text, starting with a large initial letter. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It consists of approximately 10 lines of text, starting with a large initial letter. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

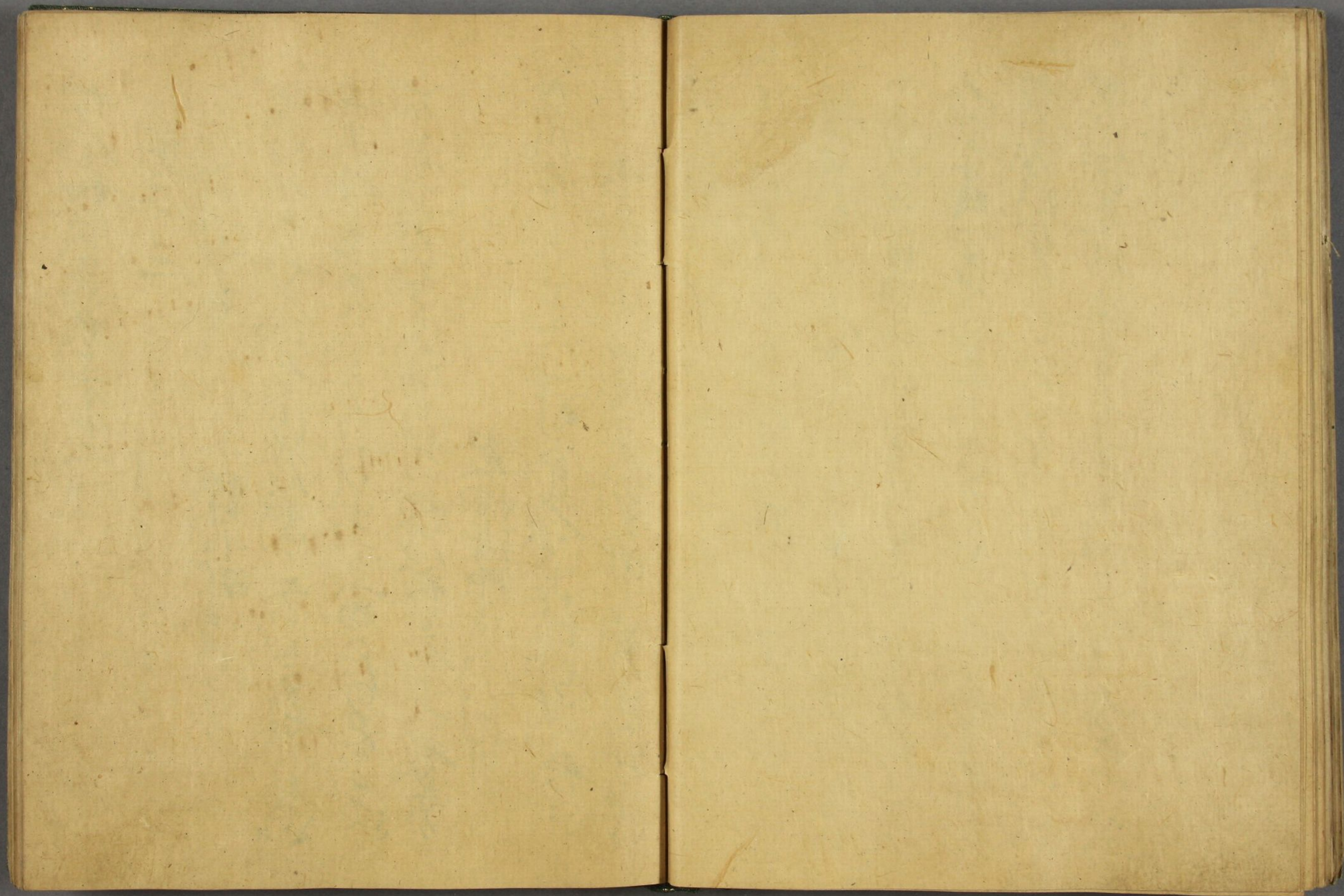
Handwritten text at the bottom of the page, possibly a signature or a date. It is written in a cursive script and is difficult to decipher.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter. The script is highly stylized and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter. The script is highly stylized and characteristic of early modern European handwriting.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, spanning two pages. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and continuous across both pages, with some variations in line spacing and character forms. The right page shows the beginning of a new line of text.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 15 lines of text, with some lines starting with a small decorative flourish or initial. The script is dense and flowing, characteristic of historical cursive handwriting. The text is arranged in a single column on the page.



古今和歌集卷才十一

恋哥二

そのこゝと

小野小町

口許のあはれを人の心はらん差さるる  
まへにねを思ふまへにまをらりもてよめだの  
あはれを  
しほふまへにこもりおほひの長るあはれ  
とてま

素性法師

秋風のかぶさしそわたりてまをらん  
あはれを  
あはれを  
あはれを  
あはれを

師のたよりとてしるるけり  
あはれを  
あはれを  
あはれを  
あはれを

あはれを

あ

あ

あはれを  
寛平御時まことのまをらん  
あはれを

あはれを

あはれを  
あはれを  
あはれを  
あはれを



Handwritten text in cursive script, first line on the left page.

Handwritten text, second line on the left page.

Handwritten text in cursive script, third line on the left page.

Handwritten text, fourth line on the left page.

Handwritten text in cursive script, fifth line on the left page.

Handwritten text, sixth line on the left page.

Handwritten text in cursive script, first line on the right page.

Handwritten text in cursive script, second line on the right page.

Handwritten text in cursive script, third line on the right page.

Handwritten text in cursive script, fourth line on the right page.

Handwritten text in cursive script, fifth line on the right page.

Handwritten text, sixth line on the right page.

Handwritten text in cursive script, seventh line on the right page.

Handwritten text, eighth line on the right page.

Handwritten text in cursive script, ninth line on the right page.

かひはしむる

君より海をいへば夜にのびあはるるまに  
そらに

いふもよもふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふも

素性法師

こゝろを養ふ人もたつたあはれに  
あはれに

はつたの舞のいふもいふもいふもいふも

大正十一年

福まきとらあはれにいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふも

秋のゆめもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふも

八月二十日  
いふもいふもいふもいふもいふも

秋まきのとき  
いふもいふもいふもいふもいふも

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of several lines of text, with some words appearing to be in a different script or dialect than the main body of text. The lines are roughly parallel and fill most of the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of several lines of text, with some words appearing to be in a different script or dialect than the main body of text. The lines are roughly parallel and fill most of the page.

しるしをたてておぼしめすに  
あつたてまつりて

たつたてまつりて

しるしをたてておぼしめすに  
あつたてまつりて

たつたてまつりて

しるしをたてておぼしめすに  
あつたてまつりて

たつたてまつりて

しるしをたてておぼしめすに  
あつたてまつりて

たつたてまつりて

しるしをたてておぼしめすに  
あつたてまつりて

しるしをたてておぼしめすに  
あつたてまつりて

しるしをたてておぼしめすに  
あつたてまつりて

しるしをたてておぼしめすに  
あつたてまつりて

たつたてまつりて

しるしをたてておぼしめすに  
あつたてまつりて

しるしをたてておぼしめすに  
あつたてまつりて

しるしをたてておぼしめすに  
あつたてまつりて

しるしをたてておぼしめすに  
あつたてまつりて

たつたてまつりて

Handwritten text in Arabic script, first line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, second line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, third line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, fourth line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, first line on the right page.

Handwritten text in Arabic script, second line on the right page.

Handwritten text in Arabic script, third line on the right page.

Handwritten text in a cursive script, likely the beginning of a line on the right page.

Handwritten text in a cursive script, continuing the line from the previous block.

Handwritten text in a cursive script, appearing as a short phrase or word.

Handwritten text in a cursive script, continuing the line from the previous block.

Handwritten text in a cursive script, appearing as a short phrase or word.

Handwritten text in a cursive script, continuing the line from the previous block.

Handwritten text in a cursive script, appearing as a short phrase or word.

古今和歌集卷才十三

新羅の川

新羅の川を流るる水は  
いと清く流るる水は  
あり  
古原の草平朝花

新羅の川を流るる水は  
いと清く流るる水は  
あり  
古原の草平朝花  
いと清く流るる水は

新羅の川

新羅の川を流るる水は

いと清く流るる水は

あり

古原の草平朝花

いと清く流るる水は

新羅の川を流るる水は  
いと清く流るる水は  
あり  
古原の草平朝花  
いと清く流るる水は

人々を驚かしし事

いふ事

あつては、まことに、

に、あつては、

から、あつては、

あつては、

あつては、まことに、

あつては、

あつては、まことに、

あつては、

あつては、まことに、

あつては、

あつては、まことに、

あつては、

あつては、まことに、

あつては、

あつては、まことに、

あつては、



花のついで

花のついでに花のついでに花のついでに

花のついで

花のついでに花のついでに花のついでに

花のついで

花のついでに花のついでに花のついでに

花のついで

花のついでに花のついでに花のついでに

花のついで

花のついで

花のついでに花のついでに花のついでに

花のついでに花のついでに花のついでに

花のついでに花のついでに花のついでに

花のついでに花のついでに花のついでに

花のついでに花のついでに花のついでに

花のついでに花のついでに花のついでに

花のついでに花のついでに花のついでに

花のついで

あまのついでにうらなひのついでに

あまのついでに

あまのついでにうらなひのついでに

藤原朝

あまのついでにうらなひのついでに

寛平時

あまのついでに

あまのついでにうらなひのついでに

あまのついでに

龍

一洗ウツク  
一洗ウツク用

あまのついでにうらなひのついでに

あまのついでに

あまのついでにうらなひのついでに

あまのついでにうらなひのついでに

あまのついでに

あまのついでにうらなひのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでにうらなひのついでに

業平朝臣の伊勢れうあへりたりあは  
可申文のりけり人よおをふあはく  
あふりくおはくあはくあはくあはく  
ららららららららららららららら

あはくあはく

あはくあはくあはくあはくあはくあはく  
あはくあはくあはくあはくあはくあはく  
あはくあはくあはくあはくあはくあはく

あはくあはくあはくあはくあはくあはく  
あはくあはくあはくあはくあはくあはく

あはくあはくあはくあはくあはくあはく  
あはくあはくあはくあはくあはくあはく  
あはくあはくあはくあはくあはくあはく  
あはくあはくあはくあはくあはくあはく  
あはくあはくあはくあはくあはくあはく  
あはくあはくあはくあはくあはくあはく  
あはくあはくあはくあはくあはくあはく  
あはくあはくあはくあはくあはくあはく

あはくあはくあはくあはくあはくあはく  
あはくあはくあはくあはくあはくあはく

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

寛平陸時

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry.

しんせいのたふらふてしんせいのたふらふて

しんせいのたふらふて

伊勢

しんせいのたふらふてしんせいのたふらふて  
しんせいのたふらふてしんせいのたふらふて  
しんせいのたふらふてしんせいのたふらふて

古今和歌集卷第十四

恋三首

たしなむ

よれ人あはれ

かりたのめいふもはるるえりかきくはなをこぼして  
あひたのしなまのしるしをいそぐはなをいそぐ

はつゆね

あはれあはれなるちかよふかきしなをいそぐ

あはれいそぐ

あはれいそぐはなをいそぐはなをいそぐ

ほろ

あはれいそぐはなをいそぐはなをいそぐ

あはれいそぐ

あはれいそぐはなをいそぐはなをいそぐ  
あはれいそぐはなをいそぐはなをいそぐ

あはれいそぐ

あはれいそぐはなをいそぐはなをいそぐ

あはれいそぐ

あはれいそぐはなをいそぐはなをいそぐ







とておのれをいふはたはたしむるは  
かたがたのいふはたはたしむるは

いふはたはたしむるは

かたがたのいふはたはたしむるは  
かたがたのいふはたはたしむるは

かたがたのいふはたはたしむるは  
かたがたのいふはたはたしむるは

かたがたのいふはたはたしむるは  
かたがたのいふはたはたしむるは

かたがたのいふはたはたしむるは  
かたがたのいふはたはたしむるは

かたがたのいふはたはたしむるは  
かたがたのいふはたはたしむるは

意性法師

かたがたのいふはたはたしむるは  
かたがたのいふはたはたしむるは

寛平清時

いふはたはたしむるは

かたがたのいふはたはたしむるは  
かたがたのいふはたはたしむるは

あつちよ  
ふかう次

うまのせは今のまゝに  
あつちよ中  
わんざんざん  
あつちよ  
あつちよ  
あつちよ

あつちよ

あつちよ  
あつちよ  
あつちよ

あつちよ

あつちよ  
あつちよ

あつちよ  
あつちよ

あつちよ

かゝるにまはるるをいふは  
まはるるにまはるるをいふは

大伴のららわ

まはるるにまはるるをいふは  
まはるるにまはるるをいふは  
まはるるにまはるるをいふは

まはるるにまはるるをいふは

伊勢

まはるるにまはるるをいふは  
まはるるにまはるるをいふは  
まはるるにまはるるをいふは

伊勢

まはるるにまはるるをいふは  
まはるるにまはるるをいふは  
まはるるにまはるるをいふは

伊勢

まはるるにまはるるをいふは  
まはるるにまはるるをいふは  
まはるるにまはるるをいふは

かむたりやふありそはさりのりあひてか  
ゆをとりてくたてとりやふ

典侍藤原の御代

だのこの葉とゆてん秋もあはしくはあそ

ゆ

近江古の御代まゝりきり

まゝりきり

海とゆてんあそりりあはしくはあそ

そつらす

ふの御代

まはたつ御代とゆてんあそりりあはしくはあそ

かへり

まはたつ御代とゆてんあそりりあはしくはあそ

中御代の御代とゆてんあそりりあはしくはあそ

ける時とゆてんあそりりあはしくはあそ  
甲辰の御代  
西暦十三年

甲辰

あまの御代とゆてんあそりりあはしくはあそ

だつらす

伊勢

あまの御代とゆてんあそりりあはしくはあそ

竊

あまの御代とゆてんあそりりあはしくはあそ

いせの御代西暦十三年

あまの御代とゆてんあそりりあはしくはあそ

かへりて

あまのわたるをばなせしむるはあまのわたるを  
あまのわたるをばなせしむるはあまのわたるを  
あまのわたるをばなせしむるはあまのわたるを  
あまのわたるをばなせしむるはあまのわたるを  
あまのわたるをばなせしむるはあまのわたるを  
あまのわたるをばなせしむるはあまのわたるを

あまの

あまのわたるをばなせしむるはあまのわたるを

あまのわたるを

あまのわたるをばなせしむるはあまのわたるを

古今和歌集卷第十五

徳三子み

五條のまゝのいぢまれぬのたらのしあはれ  
はらひのちてぬいりりきふよし月の  
さゆあまらりていほりわはよはるあつあつ  
きつたれえぬりてぬいりりきふよし  
くぬさるりの月のたらしあはれ  
えりこのあはれきふよはるあつあつ  
まてあつあつりりきふよはるあつあつ

左原東平朝臣

月やあはれ未だこころのまゝいぢまれぬのたらのしあはれ

たらし

あつあつりりきふよはるあつあつ

仲平延喜の  
抄に  
抄に

花さるるよはるあつあつりりきふよはるあつあつ

あつあつりりきふよはるあつあつ

あつあつりりきふよはるあつあつ

あつあつりりきふよはるあつあつ

あつあつりりきふよはるあつあつ

あつあつりりきふよはるあつあつ

あつあつりりきふよはるあつあつ

あつあつりりきふよはるあつあつ





あじきい法師

あじきのあきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師

貞徳天皇御中  
に御侍

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

僧正通昭

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

あじきい法師のあじきい法師のあじきい法師

伊勢

其のつらきしみじむいかにあはれし

たづねす 常康院の足こ  
たつみ

其のよぢやなごりなるをうらふもくひのそ

く

とて物もなむいそむかしの業はなうらひ

たづね 足野たつみ

人とのよもいふまゝいふもくひのそ

のつらきしみじむいかにあはれし

たづね

きとてつらきしみじむいかにあはれし

たづね

あはれしきしみじむいかにあはれし

たづね

たづね

たづね

唐衣をかきよまはれおぼしめし

く

秋風をかきよまはれおぼしめし

源宗子

あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは

あはれなるをいふは

あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは

あはれなるをいふは

あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは

あはれなるをいふは

あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは

あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは

あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは  
あはれなるをいふは

あはれなるをいふは

此の字は

新の目にはいりていふに

か

かたはらひの

か

か

寛平時屏風

の

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

ふらふらと云ふは人の心もさうなるべし

かきく

かきくは人の心もさうなるべし

かきくは人の心もさうなるべし

曲侍藤原直子

かきくは人の心もさうなるべし

かきく

かきくは人の心もさうなるべし

寛平清時

かきく

かきくは人の心もさうなるべし

伊勢

かきくは人の心もさうなるべし

かきく

かきくは人の心もさうなるべし

かきくは人の心もさうなるべし

かきくは人の心もさうなるべし

藤原直子

かきくは人の心もさうなるべし

かきく

かたしは

the first and second

the

the first and second

the first

the first

the first and second

the first and second

the first

the first and second

the first

the first and second

the first

the first and second

the first and second

the first and second

the first and second

the first and second

the first and second

the first and second

— 4th 1/2 —

○ 2nd 1/2 — 2nd 1/2 — 2nd 1/2 — 2nd 1/2 — 2nd 1/2 —

古今和歌集卷第六

哀傷三

いさかたのちゆりふくは時より

小野たけし 朝臣

うねぬいさかたのちゆりふくは時より

いさかのちゆりふくは時より

あはれいさかのちゆりふくは時より

ことしは所

らのもろいさかたのちゆりふくは時より

ゆりふくは時より

そり時ありまのいさかたのちゆりふくは時より

いさかた

僧都信延

らのもろいさかたのちゆりふくは時より

あはれいさかのちゆりふくは時より

あはれいさかのちゆりふくは時より

あはれいさかのちゆりふくは時より

あはれいさかのちゆりふくは時より

あはれいさかのちゆりふくは時より

あはれいさかのちゆりふくは時より

あはれいさかのちゆりふくは時より





はなね

あはれなる  
もくもく  
ありたり

はなね

あはれなる  
もくもく  
ありたり

はなね

あはれなる  
もくもく  
ありたり

はなね

あはれなる  
もくもく  
ありたり

はなね

あはれなる  
もくもく  
ありたり

はなね

あはれなる  
もくもく  
ありたり

ふれはるるうらもふもほしきふりさ  
ふらふままほしきしてひるのこころ  
しあつちりしきりのみほしき人の  
あつちまてあつちりなつちり  
ふもほしきまてふり

僧正遍昭 著人及世書

なまのあふるらぬなりきり物よらぬ  
はらほしき物 寛平十の月書 後三  
可急のほしきまてあつちりてのな  
のあつちりしきりなつちりしきり  
あつちりしきりなつちりしきり

ていしりあふ

新院書信後有女直源氏時大印女書

うらほしきあつちりしきり  
あつちりしきりのなつちりしきり  
うらほしきあつちりしきり  
あつちりしきり

あつちりしきり  
あつちりしきり  
あつちりしきり  
あつちりしきり  
あつちりしきり

Handwritten text at the top of the right page.

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.

Second section of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Third section of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Fourth section of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Fifth section of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Sixth section of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Seventh section of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Eighth section of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Ninth section of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Tenth section of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Eleventh section of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Twelfth section of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Final section of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

山田

いふことばはむかしに書きたりしが  
なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかし

なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかしき事あり

なつかしき事あり

大正十一年

Handwritten text in cursive script, likely a title or opening line.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

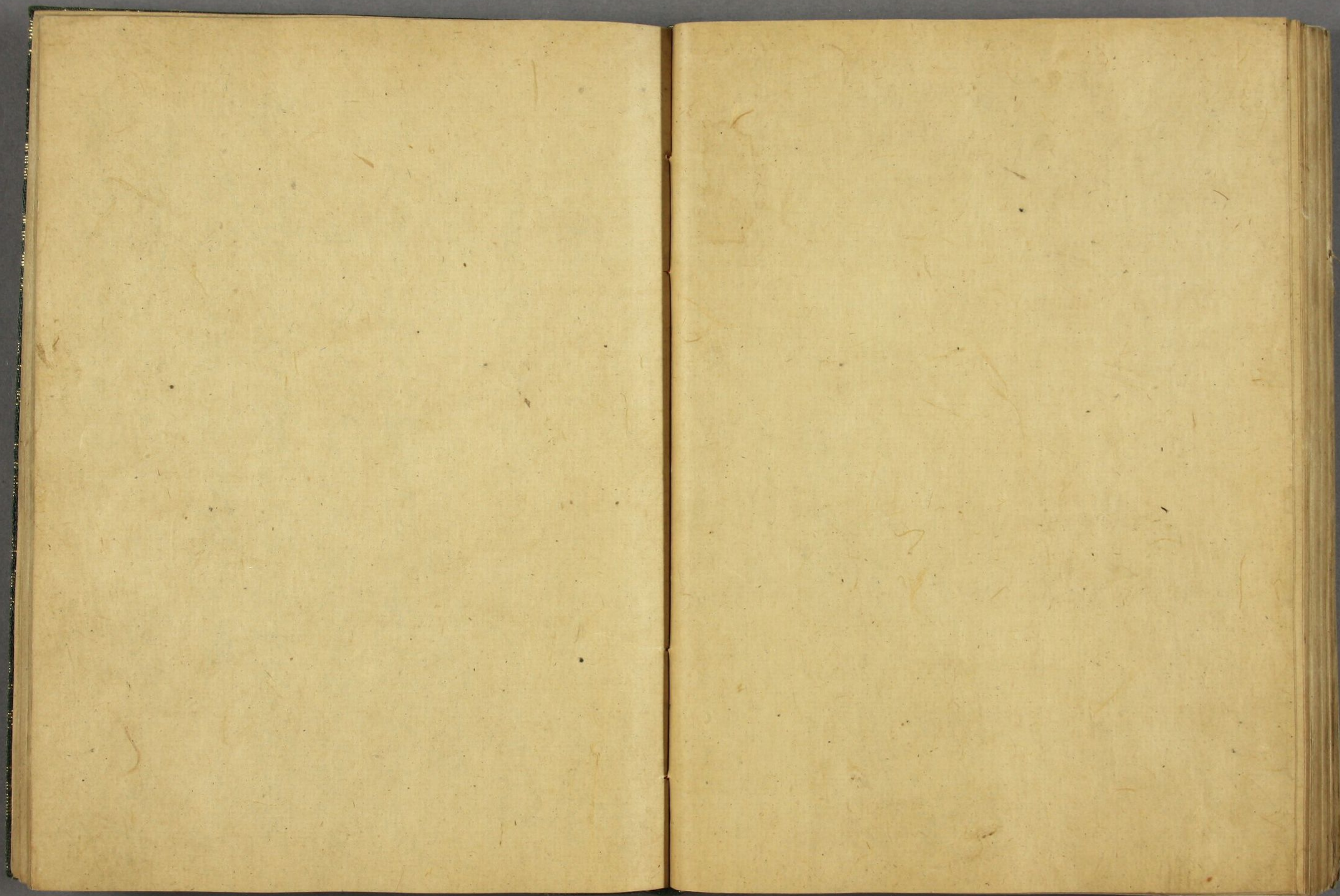
Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.







かしてかてはるるあな

あつたのまじり

ひきまわりのいづれかあつたあつたあつたあつた

二條のまじりあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

かきつばたの歌

かきつばたの歌にきこゆはるかに  
女をたをすむくはるかに

かきつばた

かきつばたの歌にきこゆはるかに  
かきつばたの歌にきこゆはるかに

かきつばた

かきつばたの歌にきこゆはるかに  
かきつばたの歌にきこゆはるかに

かきつばた

かきつばたの歌にきこゆはるかに  
かきつばたの歌にきこゆはるかに

かきつばた

かきつばたの歌にきこゆはるかに  
かきつばたの歌にきこゆはるかに



Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text, possibly a section header or a specific phrase.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text, possibly a section header or a specific phrase.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text, possibly a section header or a specific phrase.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text, possibly a section header or a specific phrase.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text, possibly a section header or a specific phrase.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

Handwritten text, possibly a section header or a specific phrase.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or historical document.

寛平侍きりのまじり合ひ

あつちのさか

白木のかりかきもいふるもいふるもいふるも

ちりし得のりくひりしりしりしりしりし

ちりすたもいふるもいふるもいふるも

しりしりしりしりしりしりしりし

あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。

あつちのさか。あつちのさか。

あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。

あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。

あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。

あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。

あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。

あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。

あつちのさか

あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。

あつちのさか

あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。

あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。

あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。あつちのさか。

あふいふちりりあまのなみのうみ  
ほりもたのむのうみなるまをくま  
ふりまるとまていふていふ

藤原そとむ

あまのうみりりりりりりりりりり  
ゆき

あまのうみのうみりりりりりりりりりり  
あまのうみのうみりりりりりりりりりり

あまのうみのうみりりりりりりりりりり  
あまのうみのうみりりりりりりりりりり

あまのうみのうみりりりりりりりりりり

あまのうみのうみりりりりりりりりりり  
あまのうみのうみりりりりりりりりりり

あまのうみのうみりりりりりりりりりり

あまのうみのうみりりりりりりりりりり  
あまのうみのうみりりりりりりりりりり

あまのうみのうみりりりりりりりりりり  
あまのうみのうみりりりりりりりりりり

あまのうみのうみりりりりりりりりりり  
あまのうみのうみりりりりりりりりりり

きりけり所こりりめいまはへきま  
いかにまていかにま

伊勢

あふまうふ舟のきみいりうら海のらんまめ  
かろくふしあつていり

真ついで

あまてのきまうらついで浪のこまて風がけり  
あのをまていりていり

在急行平瀬

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

布引の流るる水とて入るあつていり  
いりり時いりり

いかにいかに

あまてのきまうらついで浪のこまて風がけり  
あのをまていりていり

兼均は師

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに  
いかにいかに

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

龍門の海とていかにいかにいかにいかに

伊勢

千代を... 朱雀... 月... 人...

...

... 三條...

...

...

...

...

同... 屏風... 三條の可... 屏風の...

...



いかに時をたててゆくか  
屏風のうらみもあはれ

故土別

あはれいかに時をたててゆくか  
いかに時をたててゆくか

古今和歌集卷第十八

雑歌下

歌三首

後人一首

中なるあつひはふりしつらふのちかぬまはひに  
くちりしつらふのちかぬまはひに  
あつひはふりしつらふのちかぬまはひに

小野大士の御歌

あつひはふりしつらふのちかぬまはひに  
くちりしつらふのちかぬまはひに  
あつひはふりしつらふのちかぬまはひに

あつひはふりしつらふのちかぬまはひに  
くちりしつらふのちかぬまはひに  
あつひはふりしつらふのちかぬまはひに

小野大士

あつひはふりしつらふのちかぬまはひに  
くちりしつらふのちかぬまはひに  
あつひはふりしつらふのちかぬまはひに

小野大士

あつひはふりしつらふのちかぬまはひに  
くちりしつらふのちかぬまはひに  
あつひはふりしつらふのちかぬまはひに

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document.

Handwritten text, possibly a signature or a specific name.

Handwritten text, possibly a date or a specific reference.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several lines of cursive script.

Handwritten text, possibly a signature or a specific name.

Handwritten text on the right page, starting with a large initial letter.

Handwritten text, possibly a signature or a specific name.

Handwritten text, possibly a signature or a specific name.

Handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.

かきつばたのうた

かきつばた

かきつばたのうた

かきつばたのうた

かきつばたのうた

かきつばた

かきつばたのうた

かきつばたのうた

かきつばたのうた

かきつばたのうた

かきつばた

かきつばた

かきつばたのうた

かきつばたのうた

かきつばたのうた

かきつばた

かきつばたのうた

かきつばたのうた

かきつばたのうた

かきつばた

わらひれどつれは今も我の人の心もあはれなるぞ  
はるもけてはゆきゆく時より

平山いぢ

浮世の心せりこころあはれなる我の心もあはれなる  
わらぬめりゆきゆく時より  
かこのあはれなるはるもけてはゆきゆく  
つとてはけてはゆきゆく時より

わらのきいん

清持や極  
また、豊田

はるもけてはゆきゆく時より  
わらぬめりゆきゆく時より  
かこのあはれなるはるもけてはゆきゆく  
つとてはけてはゆきゆく時より

清原深養父

えきまの春ははるもけてはゆきゆく  
かつ小竹けり時ふと兼中文のこころなすゆり  
るる清の事よはるもけてはゆきゆく

伊勢

はるもけてはゆきゆく時より  
わらぬめりゆきゆく時より  
かこのあはれなるはるもけてはゆきゆく  
つとてはけてはゆきゆく時より

時よりいかにいふ海もあましくおもふべき  
なごりぞねははくしうもな

まじりのうた

海はくらくまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり  
ハルハルハルハルハルハルハルハルハルハルハルハルハル  
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき  
ちかちかちかちかちかちかちかちかちかちかちかちか  
たけのこたけのこたけのこたけのこたけのこたけのこ  
あかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかあか  
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき  
深き水のうきうきうきうきうきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき

我が世なるはなはなはなはなはなはなはなはなはなはなはな  
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき

あつたてのうらみはなほ  
あつたてのうらみはなほ  
あつたてのうらみはなほ

か

あつたてのうらみはなほ  
あつたてのうらみはなほ  
あつたてのうらみはなほ

かろね

あつたてのうらみはなほ  
あつたてのうらみはなほ  
あつたてのうらみはなほ

あつたてのうらみはなほ  
あつたてのうらみはなほ  
あつたてのうらみはなほ

か

宗普大禪

あつたてのうらみはなほ  
あつたてのうらみはなほ  
あつたてのうらみはなほ

まのほしをま

まのほしをまのほしをまのほしをまのほしを

歌よみ

まのほしをま

まのほしをまのほしをまのほしをまのほしを

まのほしをま

まのほしをまのほしをまのほしをまのほしを

まのほしをま

まのほしをまのほしをまのほしをまのほしを

まのほしをまのほしをまのほしをまのほしを

まのほしをま

まのほしをまのほしをまのほしをまのほしを

まのほしをまのほしをまのほしをまのほしを

時よみ

二条 徳川の細道

まのほしをまのほしをまのほしをまのほしを

題よみ

まのほしをま

まのほしをまのほしをまのほしをまのほしを

まのほしをまのほしをまのほしをまのほしを

まのほしをまのほしをまのほしをまのほしを



伊勢のついで

伊勢

あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに

あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに

あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに

あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに

あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに



ふらむのうたふらむ

いふことなりしはしるすことありてか

かきとていふことなりしはしるすことありてか

いふことなりしはしるすことありてか

伊豫

いふことなりしはしるすことありてか

かきとていふことなりしはしるすことありてか

古今和歌集卷第十九

雜躰

短歌

題名

後人

あふその まれあふる。あふふら わあつひ。  
あふふれ るれ時あく ちのあひ ましあふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ

あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ  
あふふれ あふふら あふふれ 人あふふ

うた

ほつた



うきとよ 今よりい へ 終りぬれ かにうらまひ  
 うきのま ありうたて きこあけ 十のまの  
 うきふし ありまの くらまの くらまの  
 うきのま ありまの くらまの くらまの  
 うきふし ありまの くらまの くらまの  
 うきのま ありまの くらまの くらまの  
 うきふし ありまの くらまの くらまの  
 うきのま ありまの くらまの くらまの  
 うきふし ありまの くらまの くらまの

うきとよ 春のうらまひ へ 終りぬれ かにうらまひ  
 うきのま ありまの くらまの くらまの  
 うきふし ありまの くらまの くらまの  
 うきのま ありまの くらまの くらまの  
 うきふし ありまの くらまの くらまの  
 うきのま ありまの くらまの くらまの  
 うきふし ありまの くらまの くらまの  
 うきのま ありまの くらまの くらまの  
 うきふし ありまの くらまの くらまの



旋顔寺

詠三首

後入一首

ららむはふらむくくはまのまのつるく  
さうにけはるるるるる

や

まじりのまじりのまじりのまじりの  
まじりのまじりのまじりのまじりの

題一首

まじりのまじりのまじりのまじりの  
まじりのまじりのまじりのまじりの

し  
兼

まじりのまじりのまじりのまじりの  
まじりのまじりのまじりのまじりの

まじりのまじりのまじりのまじりの

詠三首

詠三首

後入一首

梅花をまじりたるまじりのまじりの  
まじりのまじりのまじりのまじりの

素性法師

まじりのまじりのまじりのまじりの  
まじりのまじりのまじりのまじりの

藤原教行卿

まじりのまじりのまじりのまじりの  
まじりのまじりのまじりのまじりの



ついでにさるるの御書

藤原の御書

いかにゆへにあらはれし御書

あつたまの御書

あつたまの御書

あつたまの御書

あつたまの御書

寛平御書

御書

御書

御書

清原御書

御書

春の光をたぐひて  
花の香をたぐひて  
草の緑をたぐひて  
鳥の音をたぐひて  
虫の音をたぐひて  
水の音をたぐひて  
風の音をたぐひて  
雪の音をたぐひて  
雨の音をたぐひて  
雷の音をたぐひて  
雲の音をたぐひて  
月をたぐひて  
星をたぐひて  
空をたぐひて

春の光をたぐひて

春の光をたぐひて

春の光をたぐひて

春の光をたぐひて

春の光をたぐひて

春の光をたぐひて

春の光をたぐひて

春の光をたぐひて

春の光をたぐひて

平中集

あはれなる人なほのこころを  
うらみかたのこころを  
あはれなる人なほのこころを  
うらみかたのこころを  
あはれなる人なほのこころを  
うらみかたのこころを  
あはれなる人なほのこころを  
うらみかたのこころを  
あはれなる人なほのこころを  
うらみかたのこころを

あはれなる人なほのこころを  
うらみかたのこころを  
あはれなる人なほのこころを  
うらみかたのこころを  
あはれなる人なほのこころを  
うらみかたのこころを  
あはれなる人なほのこころを  
うらみかたのこころを  
あはれなる人なほのこころを  
うらみかたのこころを

秋の野に暮るる麻のこころを  
あはれなる人なほのこころを

あふれいんふふ成りぬにたふりてい月あつち

たのほしきらふ人

まろいせいのいんふふふふふふふふふふふふふふふふ

まのま

やいふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

伊集

るあふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

か人ふらふ

あふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

あふらふ

あふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

あふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

くう屎海らふ女

あふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

あふらふ

あふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

大楠源ふらふ女

あふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

あふらふ

あふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら



古今和歌集卷第二十

大守所御

あまのりつりた

あまのりつりたあまのりつりたあまのりつりたあまのりつりた

日本紀よはくらくらあまのりつりたあまのりつりた

あまのりつりたあまのりつりた

あまのりつりたあまのりつりたあまのりつりたあまのりつりた

あまのりつりた

あまのりつりたあまのりつりたあまのりつりたあまのりつりた

あまのりつりた

あまのりつりたあまのりつりたあまのりつりたあまのりつりた

あまのりつりた

あまのりつりたあまのりつりたあまのりつりたあまのりつりた

あまのりつりた

あまのりつりた

あまのりつりたあまのりつりたあまのりつりたあまのりつりた

あまのりつりたあまのりつりたあまのりつりたあまのりつりた

あまのりつりたあまのりつりたあまのりつりたあまのりつりた

あまのりつりたあまのりつりたあまのりつりたあまのりつりた

あまのりつりたあまのりつりたあまのりつりたあまのりつりた

ついでに井戸を掘りて水をくみぬにや  
556

いふは...  
いふは...

いふは...  
いふは...

いふは...  
いふは...

いふは...  
いふは...

いふは...  
いふは...

いふは...  
いふは...

いふは...  
いふは...

いふは...  
いふは...

東寺

いふは...  
いふは...

いふは...  
いふは...

ワセニシテモトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ  
キレテモトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ

モトヨリ

モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ

モトヨリ

モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ

伊勢

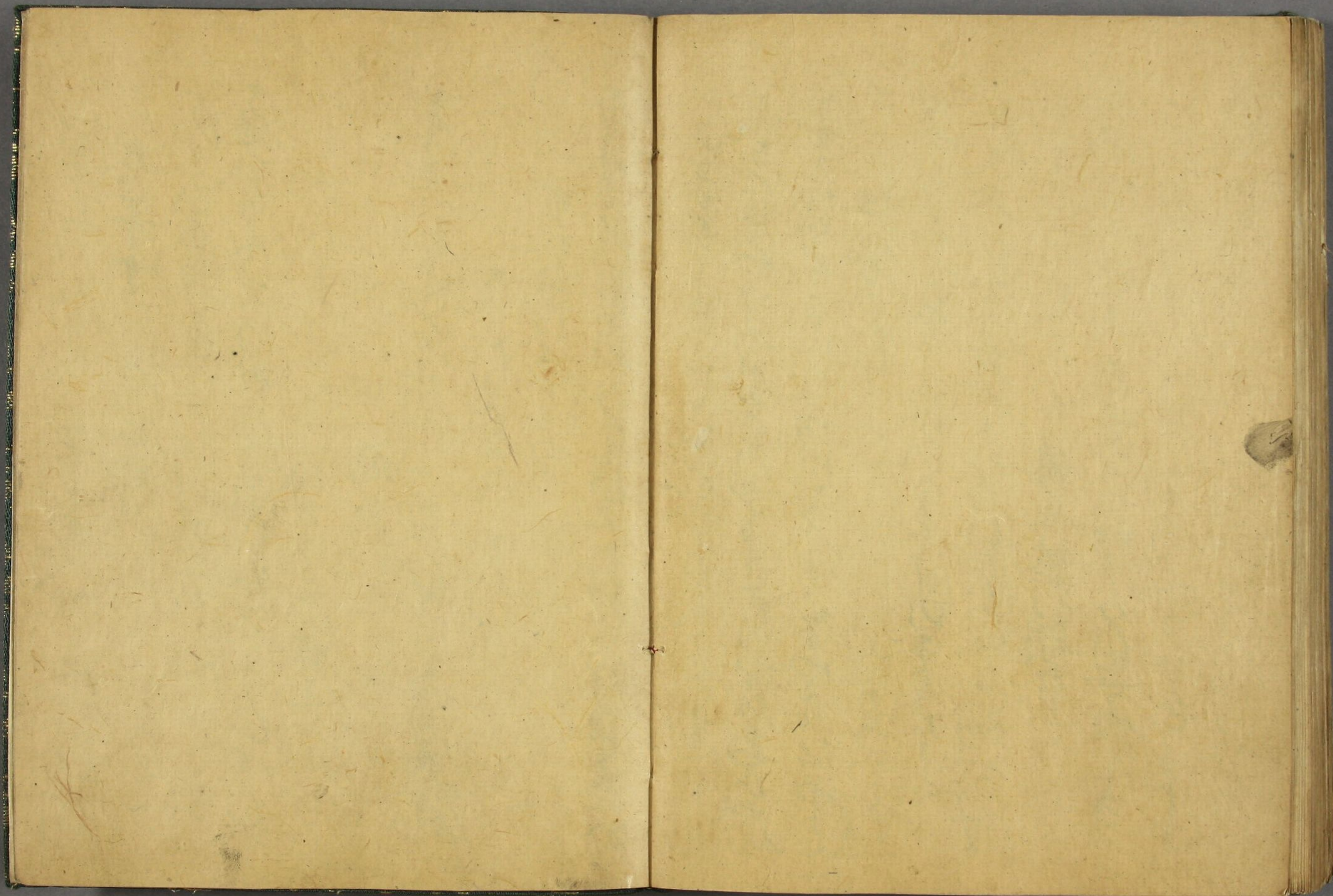
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ  
モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ

藤原敏行朝臣

モトヨリキレテモトヨリキレテモトヨリキレテ

モトヨリ





家々稱沈中々中書入心書城奇 今別書

卷第十 物右部

いんー はつおき

ふ海入家本いんーかひ書のしれいんーいんーいんー

左部云下之輝上

勝占

かやういんーいんーいんーいんーいんーいんーいんーいんー

ふたらの本 友則下

くれの行 了也

いんーいんーいんーいんーいんーいんーいんーいんー

忍系 利貞下

よまの井 ちやうし海

ふいこまら

よまのいんーかゆひくふいんーいんーいんーいんーいんー

かゝる 清行下

ちやうし海 ちやうし

あむら

いんーいんーいんーいんーいんーいんーいんーいんー

いんーいんーいんーいんーいんーいんーいんーいんー

あむら ちやうし ちやうし ちやうし ちやうし

卷第十一

奥に... 家... 山... 山...

そふん... 山... 山... 山... 山...

卷第十一

山... 山... 山... 山...

おふん... 山... 山... 山... 山...

おふん... 山...

山... 山... 山...

山... 山... 山... 山...

卷第十四

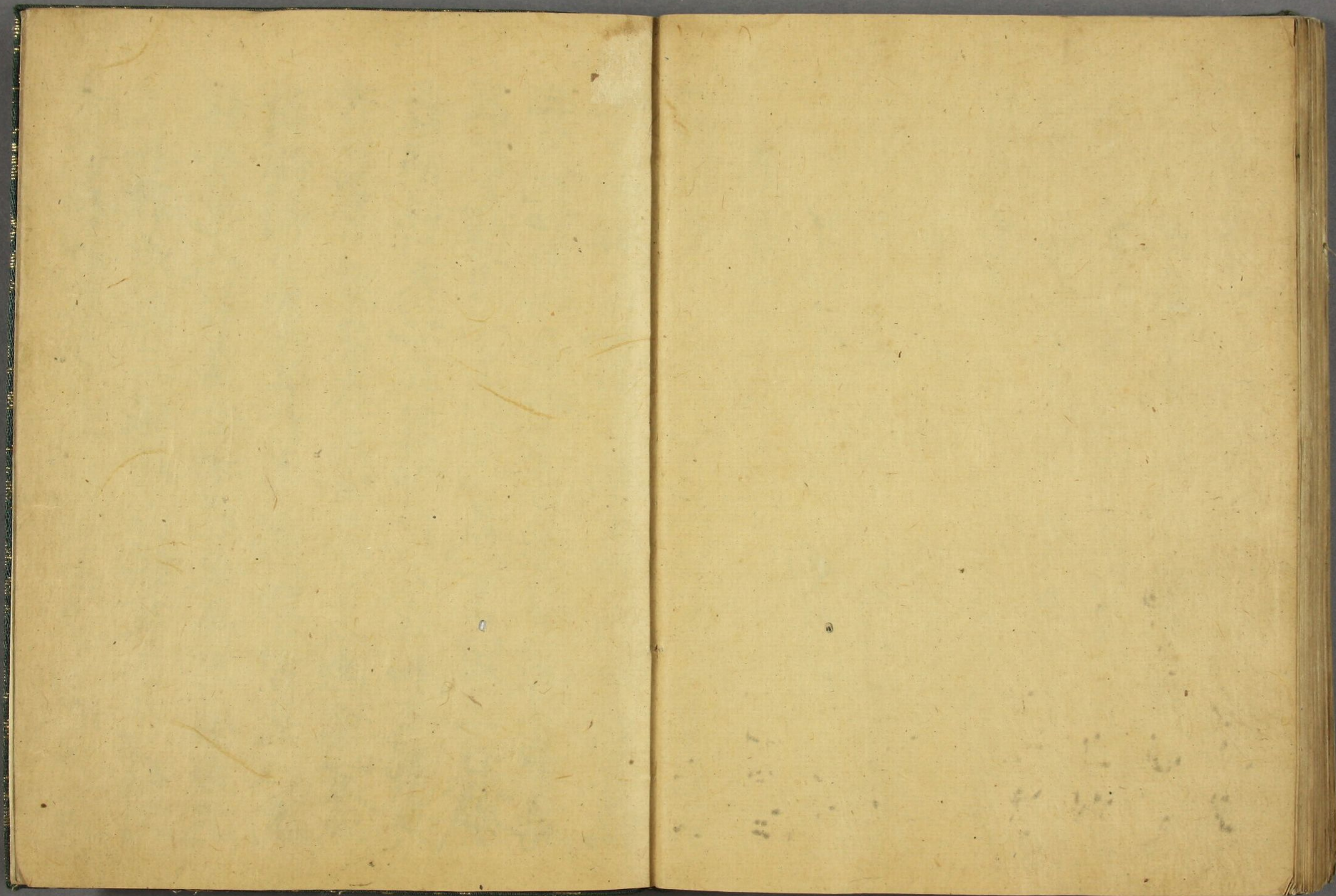
山... 山... 山... 山...

山... 山... 山... 山... 山...

山... 山... 山... 山... 山...

山... 山... 山...

山... 山... 山... 山... 山...



古今和歌集序

純泚序

夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也人之在世不能無為思慮易遷哀樂相感感生於志諫形於言是以遠者其聲樂怨者其吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫亘於和歌。有六義一日風二日賦三日比四日興五日雅六日頌若夫春鳥之嘯花中秋蟬之吟樹上雖言曲折各發乎情物皆有之自然之理也然自神世七代時質人淳情欲無分和歌未化逮于素交焉尊到出雲國始有三十一字之詠今及哥之作也其後雖天神之孫海童之女莫不以和歌通情者爰及人代世風大興長歌短哥踈頭混女之類雜旂北一泐流漸繁習於構雲之樹生自寸苗之煙浮天之波起於一滴之露至如雜泐津之什獻天皇留緒川之篇報太子或事用神文

或與入幽玄但見上古之奇多存古質  
之語未為耳目之說徒為教戒之端古  
天子每良辰美景詔侍臣預宴筵者獻  
和奇君臣之情由斯可見賢臣之性於是  
相分所以隨民之欲擇士之才也自秦漢皇  
子之初作詩賦詞人才子慕風繼塵移後  
漢家之字化我日域之俗民業一改和奇  
漸衰然於有先師掃女<sup>大</sup>人夫者高振神  
妙之思獨步古今之間有山邊赤人者  
並和歌仙也其餘業和奇者綿之石繩及  
彼時宴饗清人貴者流浮詞也與艷流  
泉涌其實皆落其花孤榮至有好也之  
家以此為花多之矣九食之客以此為活計  
之謀故才為婦人之右難進丈夫之前近  
代取古風者饒二三人也長短不同論以可奇  
花山僧云<sup>云</sup>得奇<sup>云</sup>然其詞花而少實必畫  
畫好女之情動人情在君中將之奇其情有  
餘其詞不足也蓋花雖少秋色而有董  
香文琳巧<sup>云</sup>物然其神迹倍必實人之若舞

衣宇治山僧喜撰其詞花麗而首尾修飾如  
學秋月過曉雲小野小町之哥古衣通姬之  
流也然勉而云氣力如病婦之若花於大友  
思之之哥古猿凡丈夫之改如願有逃白之向  
祇其鄙如田夫之息花示也此所云性流安  
者不可捨教其大庭以心勉為基不念和哥  
之趣名如修人爭事榮利不用祿和哥也哉  
此哉雖貴甚相將富餘金錢而肯未腐於土  
中者先滅於世上適為後世被知者唯和哥  
之人而已何者語述人所義憤神明也昔

平城天子詔侍臣令撰萬葉集自今以來時歷  
十代數過百年其後和哥亦不被採雖風  
流必野言相輕情如在納言而皆以他才聞  
不以斯道頭

伏惟他年

陛下御宇于今九載仁流秋津洲之外惠  
茂筑波山之陰岡變為瀨之聲幸之同  
砂長為巖之頌洋之滿耳思繼既絕之  
風欲具久廢之道爰詔大內訖化友則御  
書所須化貫之弟甲斐女目九河內郎桓右

衡山府生王生忠峯等各獻家集并古來舊  
歌日續万葉集於是重有詔部類所奉之等  
勒為二十卷名曰古今和歌集臣等詞女春  
花之艶若竊秋夜之長况哉進忍時俗之  
朝退慙才藝之拙適遇和歌之中與以樂  
吾道之再昌嗟乎人九既沒和歌不在斯  
哉于時延喜五年歲次己丑四月十五日  
臣貫之等謹序

此集家之所稱雖說之多且任師說又加自見の  
後字之證女不顧老眼之不堪事自書之  
此代僻業之好士等以書生之失錯稱有職之  
秘事之謂道之魔性不可用之但女母用格之可  
隨其身之不好不可存自他之左列志同  
若一の也之

貞應二年七月廿日

天

戶部南書藤

同女八日合後合既入為言乎

侍嫡孫了のわね来し證女



